

## 佐賀医学史散歩　・・・石長寺

### 福地文安のこと

青木歳幸

2011年3月7日の午後に、佐賀大学近くの石長寺の石碑調査に井上敏幸佐賀大学名誉教授、大塚俊司佐賀大学地域学歴史文化研究センター教務補佐員とでかけた。近くにお住まいの田中道雄佐賀大学名誉教授も途中から駆けつけられた。



石長寺跡は佐賀大学と辻の堂の間のほぼ中間にある。石長寺はすでに廃寺となっており、墓石や石碑の奥に民家が一軒あるだけである。

じつは佐賀大学から辻の堂にかけての道路拡幅工事にこれらの石碑や墓碑がかかり、処分される怖れがあったからだ。県立図書館の郷土資料室多々良友博氏も駆けつけてくれた。

井上先生らが石長寺の由緒を記した享保14年の碑文を解読している間に、田中先生は風邪気味とのことで途中で帰られた。帰るときにこの辺の墓碑も以前調査したことがあると多々良氏につぶやかれた。

青木が川崎延賢という川崎道民の先祖関連だと思われる墓碑を調査し、多々良氏は田中先生が指摘したあたりの墓碑を解読していた。それが福地文安墓であり、その碑文が次の文である。

#### 福地良敏仲君之墓

福地廣居稱文安家世侍醫老諱卿利稱  
道林老扈 駕沒於途君年十一承嗣萬  
延元年 公命遊大坂學於緒方洪庵文  
久三年癸亥夏六月廿日病沒嗚呼哀哉

文意は福地良敏仲の墓で、福地廣居ともいう、文安と称し代々鍋島家侍医である。父親の道林が、藩主の参勤交代にしたがっていた途中で病死したので、文安は11歳で家を継いだ。万延元年（1860）に公（鍋島直正）の命を受けて大坂の緒方洪庵の塾に学ぶも、文久3年（1863）に病没した。ああ哀しいかな、とある。

扈というのは隨う意味で、駕は藩主の旅の駕籠ということで、参勤交代に随行していたということだろう。駕の前に敬意を示す闕字があるのでこの駕が藩主のものとわかる。

文安の父親の道林は鍋島公侍医で、『鍋島直正公伝』によれば、医学寮が開講した天保5年（1834）10月21日記事に、「内科に西岡長垣、牧春堂、古賀安道、福地道林等、外科には町医納富春入あり。就中納富は名声高く切腹をし損じたる者の腸を包み、陰

囊の瘤を切断し、婦人の陰門より情夫の挿入せる木片を抜き取りたることありて、のちに古賀穀堂の痔花を截りたるも此人なり」とある。

道林子の福地文安は良敏、廣居などともいい、11歳で家督相続をして、万延元年に緒方洪庵塾に入門したとある。『緒方洪庵伝』所載の門人帳「(適々塾門生)姓名録」の万延元年をみると、次のように出ていた。

萬延元年六月九日入門 肥州佐嘉

大須賀道貞

古賀 元才

福地 文安

大須賀道貞、古賀元才、福地文安の三人が連れ立って、緒方洪庵に入門したことがわかる。墓碑銘に鍋島直正公の命令とあるので、藩からの命令で緒方塾に出かけたことがわかる。

このときの医学寮教導方頭取（安政五年から慶応元年まで）が、大庭雪斎であり、雪斎は大坂の蘭方医中天游につき、緒方洪庵と一緒に学んでいたので、雪斎が西洋医学を学ぶなら、緒方洪庵塾だぞと勧めたことは間違いない。

同寺跡にある川崎家については次回触れるとして、石長寺碑文と、福地文安墓、川崎延賢墓は、佐賀医学史にとって、貴重な歴史的事実を教えてくれるものであることは間違いない。なんらかの形での保存が望ましいと考えている。